
私は人間じゃない

?ユッキーは魔王様?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は人間じゃない

【NZコード】

NZ8040N

【作者名】

?コツキーは魔王様?

【あらすじ】

私は普通に過ごしてた。だけどじわりじわりとくる、覚醒の時、私は同族と出会い、家を出る。私が人間じゃなくても受け入れてくれる?

始める前に（前書き）

特殊設定
頑張るぞ～

始める前に

名前：跡部 魅？ Miou Atobe

学校：永帝学園 3年 14歳 女

詳細：跡部 景吾の娘
ヴァンパイア

吸血鬼で吸血鬼の姫様で宝
ヴァンパイア

この事は本人も知らないし仁王やヴァンパイアしか知らない
覚醒したのは13歳の時

不登校中で母は他界している

”跡部”が嫌いでテニスは出来る（強い）
オリジジナルの技あり

吸血鬼設定
ヴァンパイア

名前：仁王 雅治

詳細：魅？を覚醒させた本人で魅？が好き
この事は誰一人知らない

始める前に（後書き）

ううん

迷った

仁王か幸村で

他の人の設定は本編にて

Act 1 異常

私は普通に暮らしたいだけなの
私には才能がなかつた。

『勉強』も『運動』も、

そんな私に勝手に『期待』して勝手に『失望』する大人や子供
裏でも表でもましてはメイド達でさえ
お父様は知らない。

私が

『あれで景吾様の娘なのかしらねえ』

とか

『何でこれ位も出来ないんだ』

とか言われてる事を

ある日私は女子に呼び出された。

理由は『忍足^{おしだり} 侑哉^{ゆうや}』と仲がいいこと、
幼馴染だから仕方ないし親同士が仲がいいんだから仕方ないと口口
解決する私。

そんな日の出来事

『はあ、まったく懲りない人達。』

私は、溜息をつきながら、目の前で睨んでくる、女達に言った。

「ハア?? テメエふざけてんなよ。」

この人がリーダか。

「そ、そ、幼馴染で、”跡部”だからって、調子のつてんなって力
ンジイー。」

調子になんか乗っていないし

バーン

頬を叩かれた。

イタツ

口切つちゃつたじやん

口から流れる血

血の匂いが濃い
なんか気持ち悪いクラクラする。

「何やつとんの？？」

そんな時に来た

事の発端の『忍足 侑哉』

「ちょ魅？！－自分らがやつたんか？」

彼は彼女達を睨む

だが私はなぜか

飢えていた

血イ血ガホシイ

私は頑張つて理性を保つ

その時は解決した

だがその日の夜の帰り道私は

人間ではなくなくなつた・・・

Act 1 異常（後書き）

出来た

とりあえず過去編です

Act 2 私は人ではないの？

侑哉が帰り今日は私一人で帰つて行つた

この後起ころる事を知らないで・・・

「キヤアアヤメテツ！――！」

誰かが助けを呼んでいる

私は気になりその場所に向かつた

そこには血が充満していた

また私は血に飢えた・・・

こんなの人間じゃない！！

私はそう思つた

「ハツもつと殺してえな（ニヤリ）」

女を殺した男は私に向かつて歩いてきた

ヤバイとは思つたが私は

本能的に思つてしまつた

血コイツノ血ガホシイ

知らないそんなのこんな感情でも血の充満している場所にいて私の理性も限界が近い

「ハツテメヒも殺してやるよ」

この男は狂ってる

本能的に感じた

だが逃げようとは思わない

だつて

『 血ガノミタイカラ 』

私の理性や感情は残つていなかつた

気が付けば私は

男の人の血を最後の一滴まで飲み干していた・・・

だが私は

『足りないもつともつと』

と気が付けば

女2人

男3人の血を貪り飲んでいた

気が付けば家にいた私は眠りについた

私は思つた
私は

人間ではないの?と・・・・・

Act 3 不登校（前書き）

そういうえばこの前出てきた

忍足 侑哉は

忍足 侑士の子供です

部活は男テニR部長で大阪弁を喋る
イケメンで魅？の幼馴染

魅？LOVE？

家は病院です

女嫌い

魅？は別

Act 3 不登校

私はあの日から学校に行っていない

理由は簡単

『いつ食えるか分からぬから』

ただそれだけの理由

お父様は

「学校に行きなさい」

や
「話をしよう」

とか言ってくる

ケド私が人と会うだけで『食える』と言つことを知らない
だから私は家に引きこもりずっといる

それしか人を襲は無いようにする為（と言つた）これしか知らないから（
のだが）

でも時々思う

私が『ヒト』だったら『外に出れるのに』と

／？？？ sides／

俺はいつも見とった

愛する女・・・魅？の事

テニスで中学3年として全国大会決勝後に行方不明になつた

いや

俺の意思で消えた俺は
いつも見とつた

部長の姿

真田の姿

ブンちゃんの姿

柳生の姿など・・・・・

俺は『ヒト』ではないから

でも驚いた

『魅?』が跡部 景吾の娘とは

彼女は知らない

俺が【封印】を解いて『覚醒』させた事を・・・・

俺等の中の姫様だと言う事を

『封印』それは

姫様が生まれて来る時は人間だと言う事

13歳になつたら【覚醒】して『吸血鬼^{ヴァンパイア}』になる

姫様は特別だから

彼女たちの周りの人間ましてや父親の跡部 景吾すら知らないし俺の『仲間』だつた者すら知らない

俺や彼女が

人間ではない事を・・・・・

俺や彼女が『人』の『血』を『喰らう』

だと言う事を

【
吸
血
鬼
】

Act 3 不登校（後書き）

終わり

今のところ目標は達成します！！！

Act 4 1年後

あれから何もしないまま1年が経つた・・・・
私は幾度となく襲ってくる『食え』にもがいていた

私は自分自身を傷つけ血を飲む・・・・

他の人達の血は飲みたくない・・・・

未だに思う疑問

私は人間それとも・・・・

【化け物】?

（景吾 side）

あれから1年経つた

最初は悪い悪戯や冗談かと思つてた・・・・

1年前の事件

男4人女2人お不可思議殺人事件

その日はちょうど

魅？が不登校になる前日

何があつたんだよ

俺に話せない事でもあるのか？？

俺はお前と話がしたいだけなのに
実花ミカお前が居たら今どうなつていたんだ？？

＼ side out ／

／ ? ? ? side ／

もうすぐもうすぐ出迎えに行く
ああでも会いたいぜよ

柳生やみんなに

でも俺は人を喰らう化け物だから
会いには行けない

待つていて愛しの魅？

もう少しで向かえに行つてやる
だからその時まで待つていてくれ···

／ ? ? ? side ／

Act 4 1年後（後書き）

跡部 実花
魅？の母親
魅？が幼い時に他界
景吾の妻

Act 5 同族と迎え

ああ渴く渴く

ノドが渴く

私の本能は正直者で・・・・
でも理性を保つて抑え付ける
それの繰り返し

でもそんな時に現れた

同族・・・・・

「どうも跡部 魅？さん。俺は仁王 雅治同じ【化け物】じや。正式には【吸血鬼】^{ヴァンパイア}じやよ」

そういって現れた彼

『そう・・・・私も吸血鬼なんだ・・・・』

「俺は魅？を迎えて来たんじよ

私は驚く

『外に出られるの？？』

私は聞いた

「おん、出でられるナリ。じゃけん、朝になつてからじやが・・・。

」

『わかつた私は『王せんについでこべ』

「雅治でよか」

『わかつた雅治（一二コヅ）』

私は微笑む

彼が現れた次の日の朝
私は彼と家を向けだし
自由に生きてく・・・・。

Act 6 失踪

『…………んつ…………』

「おひ起きたナリ」

『そつか…………』

彼は仁王 雅治

私をこの檻みたいな場所から出してくれる『同族』

「じゃあ行くナリ」

『ちょっと待つて』

私は手紙を置いた

内容は

お父様へ

私を探さないでください

魅?より

とたつた一言

それだけ

『こいこみつ』

「じゃあ行くナリ。」

私は小さく

『BAYBAY』と呟いた・・・・・・

跡部 景吾 side~

消えた魅？が・・・・・

電話で聞いたことは衝撃なこと
何故？何故消えた

メイドや執事によると

部屋からは出ていないらしい
だが部屋の窓が開いていた

魅？は飛び降りえないだろうなんせ3階だ

男でも無理だろう？・・・

まじで【探さないでください】だあ？？

そんなの出来るわきやねえだろ！－！

お前は俺の大事な娘なんだ

俺は電話した
かつての仲間に・・・
ライバル

＼ side end ／

＼ 真田 side ／

魅？ちゃんが居なくなつた？

跡部から電話があつた時

俺は思わず

魅？たるんじる!!
と思つてしまつた

跡部から聞いた話によると

不登校になつたのはあの不可思議殺人事件が起きた翌日
あの子に何があつたんだ？？

だが俺はここまで焦つて いる跡部が珍しいと感じてもいた

＼ END ／

Act 7 神奈川県（前書き）

F C = ファンクラブ
R = レギュラー
です

Act 7 神奈川県

私は雅治と一緒に神奈川に来た
私は初めてだつた東京から出たのは、私は小学校の宿泊学習も修学
旅行も、私は行かなかつた。
何故？

理由は一つ

行つても楽しくないから・孤独だからだつた
でも今は

楽しい

そう感じた

いつの間にかマンションに来ていた
雅治が階を押す

39階どりやら最上階らしい

部屋に入ると綺麗な部屋だつた
1人暮らしには広すぎるぐらい

雅治

私は彼に声をかけた

「ん? なんじゃ?」

『アリガトウ（ニコツ）』

ああ私笑ってる

心の底から

？？？？

「俺は魅？が幸せならそれでいいナリ（微笑み」

『アーティストのアーティスト』

嬉しい

誰かにそう言われたことが無かつたから

私は話した

お父様にすり離さなかつたことも

『あのね私何にも出来なかつたんだ。お父様にねピアノや、琴、笛字、茶道に華道にいろいろ。お父様や忍足さんとかにはテニスを、でもね全然ダメだった。唯一出来たのがテニスだけ、勉強も全然駄目で、学校ではクラスメイトや教師、家でもメイド達や執事でさえ、みんな口裏揃えて

あれで景吾様の娘なのかしらねえ

とか

何でこれ位も出来ないんだ

つて言られてて、

忍足 侑哉君と幼馴染だからってだけで、FCの子達に

近寄るな

景吾様の出来そこない

”跡部”だからって調子に乗るな

つてね言られてた。

私は私なのにな』

（雅治 side）

ああこの子はどれくらい闇を抱えてるんじゃ？
話をしてる彼女は、悲しそうで、夢くつて、どこか消えてしまいそうじやつた・・・

そんな彼女を見て

【守つてあげたい】

そう思った。

だから

「大丈夫ナリ。俺は魅？は魅？だからって思つてるナリ、だから安心しんしやい。それと一緒に、テニスもやるぜよ」

俺はそう言った

『「そうだね。私も雅治と一緒に居られて嬉しい。テニスもか、いいよ。今度ラケットとか買いに行こうね！』』

俺はその言葉に微笑んだ。

Act 8 吸血鬼（ヴァンパイア）

私は雅治に、自分の事を聞いた

『雅治』

「ん？？なんじゃ」

彼は「コーヒーを飲んでいた。
ちなみに私は、紅茶だった。

『私自身の事を教えて？？！…』

私は聞いた彼がこう答える

「魅？は、俺等ヴァンパイアの中でも、特別な存在、いわば姫様ナ
リ。

千年に一度、人間として・・・・・・【生まれて来る】んじゃ。
どの家庭かは分からん・・・・・・ランダムじゃ・・・・・・

・
能力は沢山あるナリ。

たとえば、瞬間移動

そう言つて彼は私の後ろに来て、元のイスに戻る

「【氷よ】と言えば氷が出て来るんじゃ」

彼は手の平サイズの氷で、出来た薔薇を見せてきた

『スゴイ……キレイ……ありがとう』

私は目を輝かせた

ホントに綺麗

でも気になつたことがあつた、

『飢える衝動はどうなるの??』

これが最大の問題

「これを着けときんしゃい」

そう言われて、手にした物は・・・・・赤の線が入つた十字架の形をしたブレスレットだつた。

「これで抑えれるナリ。それとも一つ。

飢える衝動を抑えるために飲む血は・・・・・・・

「じゃよ」

好きな異性の相手なん

私は人を好きになったことが無い。

『ありがとう』

私はそう言つて、与えられていた自分の部屋に戻つていった。

Act 9 買い物

ある日雅治は言った

「なあテニスに行かんか?」

私は最近は、公園に行つたりしていた。

『いいけど、ラケットとボール・・・後ハーネスも買おうの?』

「今から、ラケットを買ひにいくんだ。んで夜この近くでクラブがあるからハーネスをかりるんだよ。」

なんかハーネスの事は犯罪に近い気がするんだ・・・井戸いなか

『OKじゃよ。用意するから待つて』

私は白のワンピースジャケットを着た。

靴は白のハイヒールだ

「おおキレイじゃな

『そんなことない』

私はキレイなんかじゃないよ

私たちはず外に出ショッピングに向かつた

（～5分後～）

「いいじゃよ」

私たちが来たのは大型ショッピングセンターの中にある、スポーツ店

『どれか雅治が選んで』

私はよく分からぬから雅治に頼んだ

すると持つてきたのは白をベースにした赤い蝶が舞つてゐるラケット

『よくこんなのがあつたね』

私達はそれを買い家に戻つた。

Act10 雅治の過去

夜

私と雅治はテニスコートに向かっていた

「久し振りじゃな。テニスをやんの・・・」

彼は懐かしそうにでもぞんざに悲しそうな顔で声で呟いていた

『ねえ雅治の過去教えてよ』

私は過去を話した。

だから今度は私が聞く番

『どんなに悲しくても辛くとも私は全部受け止める。

だから話して?』

（雅治 side）

数週間経つて魅？の性格が変わったと思つた
向かえに行つた日の彼女は暗かつたの

でも明るくなつたんじや

それは結構うれしいんじゅ
でもどこかに悲しむ”俺”がいるんじゅ
でも驚いたんじゅ

魅？は強い田をしていたんじゅ

だから恋をしたんじゅな・・・・・・

だから俺は話そつと思つ

彼りと過いじたあの日々の事を

～side out～

「俺は立海に通っていた時期があつたんじゅよ

そこだテニス部に入つたんじゅ

いつも楽しかったんよ

Rになれて嬉しかったんよ

3年になつて俺は【コート上の詐欺師】^{ペテン}って言われちよつた。
ちなみに跡部 景吾も同じ時期じやつたからの

全国大会決勝で敗れて俺は姿を消した

いや消さなといけんかった

俺はの王様キングの位置にあるんじゅよ

だからよく思う奴等がいなかつたんじゅ

だから姿を消した

今は

幸村はプロジゅけん遠いのお

彼の過去は私よりはるかに重く悲しみを帶びていた

『会いたいですか?』

私は知らず知らず声に出して聞いていた

彼は一瞬驚いたような悲しみを帶びたような顔をし声を答えるを紡ぎ

「会いたくないと言つたら嘘になるのお
じゃけん会いに行けんのじゅが

会いたいゼヨ

幸村に

真田に

柳に

柳生に

ブンちゃんに

ジヤツカルに

赤也に

氷帝Rや青学R・・・四天宝寺の奴らに会いたいゼヨ・

哀しみを帯びている田

『ありがとう辛い過去を話してくれて
今度遠くからでもいいから見に行こうか?
そんなに会いたいのなら見ればいい』

「でもできん」

ああ私も性格変わったなこれも彼のおかげかな?

『大丈夫だよ』

「ありがとな魅? (ニコニ)」

久々に見た雅治の笑顔はかつこよくなつて私は惚れてしまつた

・・・・・ん??

惚れた???

「どうしたん魅???」

『つなつ何でもない!-/\/\/\/\/\/\/\/\/\/\/\/\/\/\/\/\/\』

絶対顔赤いつて

そつか私好きになつてたんだ
雅治の事が・・・・

Act 10 雅治の過去（後書き）

雅治の事が好きになつたヒロイン
どうなるんでしょう？？ww

私にも未だに不明ですww

Act 11 数か月後の心境（前書き）

久し振りの投稿

Act 11 数か月後の心境

（跡部 景吾 side）

あれから数か月がたつた・・・

俺様は・・・・魅？を見つけられない

なんで・・・・いなくなつたんだ！――！

月に1、2回、銀行からのお金が降ろされていた・・・

魅？・・・いつたいどこにいるんだ？

ああ・・・・会いたいぜ

実花

お前ならこんな時どうするんだ？。

～END～

幸村 精市 side

今の跡部からは・・・・霸気が感じられないんだ。

昔・・・・坊や・・・・リーコーマと戦っていた時みたいに俺様でもない

魅?とは会ったことがある。

とても愛らしく可愛かった・・・・

今思ひのは・・・・ナゾだらけ・・・・

俺はプロトニースプレイヤー

仁王もいなくなつて、月日が経つ

今も・・・・

「ただいまナコ(ニヘラ)

と笑って帰つて来てくれる

と思ひ俺はバカなのか?

でも不思議と会える気がする。

魅? も仁王ももうすふ現れてくれる気がする

お願いだから戻つてきて? 2人とも・・・・・・

♪END♪

あれから数か月たつた

あの後テニスしにも行く気になれなかつた私と雅治

理由は気が重かつたから

雅治の話は私より質量があった

今頃お父様たちは探しているだろう

必死に

でも・・・・・精々していたら？と想つと、気が重い

私は最近発狂することが多くなった

まだ幸せだった・・・・・幼い私の出来事の夢を見始めた

そつやつて発狂する

最初は驚いていた雅治も今では慣れたように声をかけてくれる

迷惑かけてばっかりだ・・・・

そうだ少しならいよね？

お父様たちの姿を見に行つても

大丈夫すぐ帰つてくるから・・・・・

そう思つて

私は

少しお父様の事を見に行つてきます

と置手紙をして家を出た・・・

あんな事になるとほんいもしないまま・・・

Act 11 数か月後の心境（後書き）

完全不燃焼

どうじょ（――・・）

Act 14 見に行く

あの後私は夜に家を抜け出し屋根を伝いながら元いた家に向かって
いった

置手紙は置いてきた

屋根伝いが出来るのは雅治に教わったから

そりやつていると着いた

お父様の部屋に行く・・・

が誰もいない

客室には明かりが灯つていて誰か居る事が分かる

あれはお父様のご友人だ

幼い頃会つた記憶がある

近くに行き話を聞いた

「なあ跡部気をしつかりもてよ。お前がそんなんじゃ見つからない

「…？」

「わかつてん? 今真田たちも探してくれとるだから気をしつかり持ちい?」

「俺も個人的に探してつからよい?」

「俺も付き合わされてるけどよ?」

「俺も探すよ?」

「私もです

「俺も…」

探してくれてる

それだけで嬉しかった

だから帰らうとしたその時

ガタツ

と音を立ててしまった

（柳生サイド）

私達は話をしていました
すると突然外でガタつと音がしました

「猫？か？？」

と真田君がおしゃつた時に微かに

『うわっ』

と女の子らしい声がしたので跡部さんが窓の近くにいたメイドさんに

「あけろ」

と言いました

次の瞬間

女の子が居ました

（サイドアウト）

（跡部サイド）

嘘だと思った

最初は目を疑う
だがあいつは

「魅・・・・・? ?」

俺はそう口にしていた

～サイドアウト～

見つかってしまった

早く立ち去るといついたら

お父様が私の名前を呼んで抱いた

私は喋りうとした

「魅? ビーに行つてたんだよ……探したんだぞ?」

『お父様・・・・・』

「よかつたな跡部見つかってよーーー。」

そつ回田さん?が言った

『お願いです・・・その手を離して?』

「逃げないか?」

そう聞かれた

逃げられるわけがない
まだ完全に力が使えないから

『逃げません』

と言つた

お父様は離してくれた

そしたら彼の声が聞こえた

Act 13 なんで? by 景吾 + a

（雅治サイド）

起きたら魅? はいなかつたナリ

俺は彼女の眼の視点で場所を特定する
そして向かつた先は

青学

氷帝

立海がそろつている

跡部の家

「魅? 変えるぜヨ?」

（サイドアウト）

雅治が姿を現わせば
みんなが吃驚していた・・・
そうか・・・確かにみんな同期だつたよね?

幸「なんで……ひじにいるんだい？」

確か幸村さん

今はプロテニスプレイヤーだ

仁「なんでもいいじゃん？」

『雅治・・・・』

景「なつ……なんで魅？がしつてるんだ？」

お父様は聞いた

仁「ううどもいこキ一魅？いくぜよ？」

『うそ』

忍「行かせんよ？」

私は忍足さんに掴まれた

・ 捕まれた時に運悪く・・・プレスレットが取れてしまった・・・

チヤリン

音を立てて落ちた後

私は・・・血に飢える・・・

それに気がつき雅治は忍足さんとの間に入り手をひねり離された

『つ・・・雅治・・・』

仁「わかつてゐナリ行くぜヨ?」

真「つ・・・待て!..」

仁「今度は何じゅ?」

雅治は呆れたように言つ
私は限界が近い

それが分かったのか彼は

仁「もういいから飛べないナリ行べぜよ」

と言ひて窓に向かい飛んで行つた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8040z/>

私は人間じゃない

2012年1月10日22時46分発行